

橋のない川 第六部

住井すゑ



橋のない川

新潮社版

橋のない川 第六部

昭和四十八年十一月十五日 発行
昭和五十年一月三十日 九刷

定価六〇〇円

著者 住井 すすゑ

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電話
業務部(〇三)二六六一五一一
編集部(〇三)二六六一五四一一
郵便番号・一六二 振替・東京
四一八〇八

印刷 株式会社 金羊社
製本 株式会社 大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが
小社通信係宛御送付下さい。送
料小社負担にてお取替えいたし
ます。

長篇小説 橋のない川 (6) 目次

絹雲

五

花蓼

六

落穂

九

鵲

一四

櫛風沐雨

一六

袴

一五

春寒く

一九

生々存々

二四

あとがき

二五

装
幀・関
野
準
一
郎

橋のない川

第六部

絹 雲

一

卷雲——。それが秋をよぶのか。それとも秋の季が卷雲をよびよせるのか？　ともあれ、盆地の空を北から南に悠揚と流れるその雲の、肌の白さ、つややかさ。絹雲といわれるのもさこそである。

「な、おふで。」

呼びかけながらぬいは腰をのばして、

「まア、ちょっと見てみ。」

「なんでっか？」

「あの雲や。あの雲の美しいゆうたら……。」

「ほんまに……。」

応えながらふでもやはり腰を伸ばして、

「もうすっきり秋でんなア。」

「そうやがナ。」

ぬいは深々とうなずいた。秋——。ぬいも実はそれが言いたかったのだ。

さて、ぬいとふではいつか言い合わせたようにうしろ手に腰をさすっていた。草履の表編みとは全くちがった中腰の姿勢で、暫く胡麻の実^{ごま}はたきをつづけていた二人には、雲をめでる一刻は、そのまま恰好な休憩の一刻でもあった。「なア、おふで。」と、ぬいはあきらかに笑いを含んだ声柄で、

「わい、こうやって天、見てるとな、天でなんちゅう不思議なもんやろかテ、ようけに不思議が深うなるネ。そうかて、春には春の雲がうまれてきよるし、夏には夏の雲が湧いてきよるし、秋にはああして秋の雲が渡ってきよるんやものなア。」

思いはふでも同じだった。ふではかむった手拭の端から、あらためて絹雲の流れに瞳をやった。

幾すじとも数え切れないその髪は、女人のやわらかな肢体をでも包み込んでるように、微に、微にゆれている。

「天女の羽衣——」

浮かぶ想いに、ふでは大人気もないこととはにかみ笑いをこぼしつつ、

「お姑はんは、大地は生きものやて、いつかて言うたはり

ますわなア。」

「あ。」

ぬいは頤を引いた。ぬいもまたあらためて絹雲を見やつた。

ふでは少し急きこみ口調に、

「大地が生きものやとしたら、天かてやっぱり生きものもちがいまっしゃるか？」

「なるほど。」

「生きものやとしたら、春、夏、秋、冬と、それぞれに向いた雲がうまれてくるの、あたりまえかもしれまへんわなア。」

「おおけに、おおけに。（なるほど、なるほど）そら、もう、それが道理や。」と、ぬいは大きくうなずいて、「けど、おふでにそない言われると、わい、なんやらおかぶをとられたみたいな氣イ、するがな。あははムムム。」

おかぶをとられて満足なぬいは、口を天に向けて笑った。

「ははムムム。」

ふでも自然に声が弾んで、「お姑はん、わい、このごろ、お姑はんの考えにすつきり似てきたのが自分でもようわかりまんネ。」

「そうけ。そら、うれしいこっちゃ。けども、それはひょっとかしたら、おふでがそれだけ年齢をとった証拠かもわ

からぬで。」

「さいでんなア。」

ふではちょっと言葉を切ったが、「せやけども」と、すぐに笑顔で言いついだ。「せやけども、人間、どのみち、年に一つは年齢をとるにきまつたりまんのやもン、年寄りになるのは仕様ありまへんワ。けど、その代りに、天やの大地やの生きものやてことわかつてきたんやとしたら、こんなありがたいこと、あらしまへン。そう言や、今も胡麻はたきしながら、そんなふうなこと、考えてましてン。」

「ほう。おふでも、いよいよお婆はん組かいな。あははムム。」

「さいだす、さいだす。」とふでも屈託なく笑って、「大地が生きものなりやこそ、こんな胡麻みたいな結構なものを、それもたつた三月そこそこで育て上げてくれますネ。ほんまにお姑はんの言わはる通り、天も不思議なら、大地も不思議だす。」

「そうや。ほんまに、そうやで。」

ぬいは口を引き結んで畑の一角に視線を向けた。そこには斜の切り口するどく、胡麻の刈り株が整然と列を成している。うっかり踏みつけると、ぐさり、蹴に突き刺さりそうだ。

その一すみは六月はじめまで大麦畑だった。ふでたちは大麦を刈りとったあとを、裏作物——大麦や小麦や蚕豆などの乾し場に使った。毎年のやり方だった。

さて、裏作物が乾し上るのを待って、ふでたちは又そこに鍬を入れて畑地に戻した。胡麻種を下ろすため、これも亦何十年となく繰り返してきたやり方だった。

ところで七月一日に播いた胡麻種は、三日めには早くも浅緑に芽吹いた。そして中旬には四稜の茎をのぼして胡麻らしさをほこり、八月初旬にはもう下の方から蒴果の形成をはじめた。夏作物特有の、目ざましい成長ぶりだった。

思えばそれもこれも、天と大地とのいのちの結合なのだ。「お姑はん、いつやったか、孝二が言いよりしましたわなア。」

孝二と聞くや、ぬいの瞳も耳も忽ちふでに向いた。ふでは手甲の紐を締めなおして、

「めったに牛肉も魚もよう食わぬわいらが、けっこう、達者で働いていられるのは、一つは胡麻のおかげや、て。」

「あ、そのことならわいもおぼえてるがナ。その時、別」に殺生せぬかて、自分らの作った胡麻で、身体に入用な脂肪気が間に合うんやから、百姓は何よりも結構な仕事や」て三人して話し合うた。」

「さいでしてン。けど、なんぼ百姓が結構な仕事かて、耕地が自由にならぬことには、一粒の胡麻種も下ろせやしまへん。せやから胡麻の株が抜けるのはしあわせや思うて……。」

「あはは ムムム。よろこんで抜いてくれるけ？」

「あはは ムムムア。」

ふでも笑った。そして四つん這いの恰好で刈り株を抜きはじめた。

はたき落した胡麻の實の調製はぬいの役。それよりも多少、体力の必要な刈り株抜きはふでの役——。

秋が深まれば稈の乾し場と変るその一角は、胡麻の刈り株をきれいに抜き取り、跡地を平にふみならしておくのが当然の手順だった。

ぬいは筵に膝をついて胡麻を篩った。はたきおとした胡麻は一斗ほどの量を持っていたが、その大方は胡麻の枯葉や蒴果のかげらで、篩にかけると半分以上も減るのが常識である。それを更に水洗いして砂気を除き、二日、三日と天日にさらすと、結局は三升前後におちつくのが長の経験からの教訓だった。しかしそれでも、三升の胡麻にめぐまれるのは小森では至って数少なかった。

「お姑はん、ことは、どんなあんばいでつか？」

暫くして、ふでが四つん這いのまま声をかけた。

「まア、まアやな。」

というのは、平年作にほぼ近いとの意味だ。

「さいか。それやったら、けっこうな方でんなア。」

「せやともな。ことしは稲からして育ちを急ぎよったさかいなア。こないな年柄には何の作物も、飛び切りの豊作とは行かぬもんやで。」

それもまた長年にわたる経験の教訓だった。

「そら、そうだしやろなア。」

ふでは神妙に受け止めて、「そう言や、あんまり早育ちしよるのは、たいてい、あきまへんわなア。タバコなんか、早育ちしよるのは、抜いてほかしてしまいまんのやて？」

「そうらしで。早育ちしよるのは、それだけ早うに花が咲いて、かんじんの葉の数が少ないわけやからな。葉タバコ作りが、そんなタバコを作ってた日にゃ、飯の食い上げや。」

「やっぱり何事もお太陽さんを出しぬいてはあきまへんのやわなア。」

「せやがな。この天の下に居てる限りはなア。けども、考えてみると、この胡麻ばかしはあんまりよう出来ても迷惑やで。」

「さいか？」

なぜに迷惑なのだろうかと、ふではいぶかりのいろを語尾に持たせた。

「あははムムム。」

ぬいは篩から湧き立つ塵埃を吸いながらも大口に笑って、「そうかて、仰山出来てくれたのをええことに、氣イゆるしてどんどん食べてみ、忽ち家の棟が落ちてしまうがな。」

「あははムムム。さいでしたな。」

ふでも笑った。

年間三升の胡麻を消費すると、その家の棟が落ちるとは、小森界限での言いならわしだった。家の棟が落ちるとは、いうまでもなくその家の経済が破綻することだ。これは恐らく「百姓と胡麻の油はしほればしほる程出る」と公言して、庶民に極度の犠牲を強いた曾ての支配者の智慧によるものにちがいがなかった。しかし一面、それは食品としての胡麻の美味さとその貴重性を意味するものでもあった。いずれにせよ、何升かの胡麻は、ぬいたちには大切ないのちの潤滑油だった。

「せやけどもお姑はん、年に三升の胡麻は、なかなか食べ切れしまへん。現に古いのが、まだ、だいぶ残ってますネ。」

少し間をおいてふでが言った。それは全くふでの言うとおりだった。塩味の粥が常食のくらしでは、胡麻を使っての料理といったところで、時たま季節の野菜をあえて、おさいにたのしむのが関の山。三升の胡麻は、とても年間に使いこなせるものではなかった。

ぬいは又大口に笑って、

「おかげで、家の棟が保つネ。ありがたいこっちゃとよろこびや。」

おかげは皮肉だった。その皮肉に苦笑しながら、「ハイ、ハイ。」とふでも皮肉をこめてこたえた。

「あははムム。」

皮肉が通じ合うのがおかしくて、ぬいは再び高笑い――。

ふではやがて、眼裏をみつめている自分に気がついた。

眼裏には孝二の姿がやきついていった。孝二は両足の爪先をやや外輪にして、じっと胡麻畑の前に佇んでいる。肩揚げの深い白緋の単衣に、黒い新モスの三尺帯をやや胸高にしまて――。

「孝二、なに、してるネ?」

「胡麻の花、見てるネ。」

「その花、好きけ?」

「うん。」

「なんでネ?」

「そうかて、みな、地面向いて、だまって咲いとるネ。」

なるほど、胡麻は筒形の花冠を下向きにして咲いていた。しかしふでは、それはあたりまえのことだった。だから毎夏、胡麻が咲いても、あたりまえの事として看過してきた。けれども少年の孝二には、ひっそりとうつ向いて咲くうす紫の胡麻の花が、心にしみて美しかったにちがいないのだ。今にしてふでは思う――。「孝二も、ちやうど胡麻の花みたいに、ひっそりとした少年やってんなア。」

「おふで、見イな。見イな。」

暫くしてぬいが呼びかけた。

ぬいは坐ったまま空を見上げていた。その空に、ふでもあつ!といきを呑んだ。壮麗とはこの現象か。空の海原は朱に燃えて、浮かぶ絹雲は燦として黄金色に耀いている。

ふでは声をひそめて、

「お姑はん、東京の空も、今頃はこないに見事だっしやるか。」

「さア、なア。」と、ぬいは自分の及ばぬ想像力に首をかしげて、「そら、同じに秋やさかい、絹雲かて出てようけども……。」

「けど、なんぼ空の模様が見事かて、東京のいゅうには腫

に映らぬかもわかりまへんな。」

「それやがな。東京はまだまだ地獄同然やろからなア。」

「ほんまに。」

ふでは口を結んだ。思いがせわしく胸先をかけめぐると……。

「地獄には空がないやろなア。空のない所を地獄テ言うのやろなア。空がのうては、生きものはみな呼吸がつまってしまうに……。」

大地震からまる一カ月。それでもふでたちの耳には、なお東京の地獄図絵が伝わりつつあった。

ところでその東京を一眼でも見ておきたいと、孝二と貞夫は連れ立って出かけた。一昨日（十月一日）のことで、孝二としては初めての長旅だった。しかし、ぬいもふでも安心していた。東京の地理に明るい秀昭が案内役の上に、豊太が宿を引き受けてくれる手筈になっていたからだ。

「なア、お姑はん。」と、やがて刈り株をぬき終えたふでは、跡地を横歩きに踏みならしながら、「孝二ら、もうだいたいぶあっち、こっちと歩きましたやろなア。もっとも広い東京のことやさかい、歩いてても歩いて、ほんの一部だしやろけども、それでも小森に居ては想いもつかぬことかであるやろ思いまっさ。」

「そら、そうやろとも。昔から、百ぺん聞くより一ぺん見る方がものの足しになるて言うたるくらいやものな。」

ぬいは膝を上げた。胡麻は砂篩（網目の一番細かい篩）

がすんで、調製は一段落。つづいてぬいは小束の胡麻殻を寄せて大束にまとめはじめると……。乾き切った胡麻殻は、早速、竈の燃料に役立つのだ。

ふでは横歩きの足を速めて、

「わいも今になって、孝二らが、よう、東京行きを思い立ってくれたテよろこんでまんネ。そうかて新聞はいろいろのこと、知らしてはくれまっけど、いざ、かんじんの事となると、政府筋から記事差止とかいうて、ほんまのことは発表したらいかぬて言うてきまんのやて。けど豊坊んなら新聞に書けぬことかて、孝二らには話してくれはるにちがいあらしまへん。ほんまに何が怖いというて、世間のでたらめなうわさほど怖いもの、あらしまへんワ。朝鮮人が攻めてくるの、毒をほうり込みにくるのと言うか思うと、天皇さん、行方不明にならったんで、日本はもう終いやそうなて、今から思うたらそれこそ狐を馬に乗せたみたいなハナシが、真っ昼間、どんどんひろがって行ききましたもんなア。」

「天皇さん、いよいよ生きたままおかぐれにならしたそ

うな、いうてなア。あははムム。」

笑ったあと、ぬいの口がへ、字に曲った。胡麻殻を束ねるのに、ぐいつと力をこめたせいでもあったが。

そのうわさ——天皇の行方不明説が小森辺に流れついたのは、朝鮮人大暴動説の少しあとだった。うわさはもとより風のたよりで、どこが発生源かさだかではなかったが、しかし、東京、横浜全滅、朝鮮人大暴動と重なっては、天皇の行方不明もまんざら有り得ないことではなからうと、人々が受け止めたのもむりからぬところだった。

だが、五日、六日と経つうちに、それらは全くの流言蜚語に過ぎないのが判明した。そして代りに、数千名にも及ぶ朝鮮人が、地震のどさくさまぎれに、軍隊、警察、自警団などによって虐殺されたらしいとのうわさがひろがりはじめた。

「だけど、それから大方ただのうわさやろで。」

単なるうわさであって欲しい人たちは、単なるうわさであることを願って言い合った。けれどもこのうわさだけは、やがて否みようない事実なのが明かになった。九月十八日附の新聞で、斎藤朝鮮総督が次のような談話を発表したからだ。

「今回の震災で、鮮人問題についていろいろの流言蜚語が伝えられたため、日鮮親和の上に、誠に面白くない影響が出て来ている。これは大変遺憾なこと、余は鮮人に對し、どのように諒解させたらいかと、日夜苦慮している。内地鮮人が殺傷された件については、内務関係方面に調査を依頼したり、総督府の官吏を八方に派遣して極力その事実調べをさせているが、二、三の殺傷事件の他は、いずれもその真相を突きとめるまでには至っていない。一方、朝鮮内地では、有識階級は未曾有の大震災の事故、ある程度の混乱はまぬがれないと了解している様子であるが、無知な婦女子などは悪い宣伝に迷わされて、いるのが明かなので、十分対策を講じなければならぬと考えている。もっとも今のところ、朝鮮内地で不祥事が勃発するおそれはないが、それでも当局としては万一の場合を憂慮して十分手を尽さねばならぬのは言うまでもない。とにかく、余は要務が終り次第、急いで任地に戻って日鮮の親和につとめるつもりである。」

ところで孝二から斎藤朝鮮総督の談話の模様を聞かされた時、ふでは溜息まじりに言った。

「そのあんばいやと、朝鮮のいゅうらは世間のうわさ以上

にえらい目にあわされてるで。そうでなけりゃ、総督がな
んで万一の場合を案じて十分手を尽さなあかぬ、なんて言
うもんけ。”

ぬいも「問うに落ちず、語るに落ちるとはよう言うたも
んやなア。」と、ふでの見解に同調した。しかしぬいもふ
でも、その被害者の中に、あの朴相竜^{はくさうりゅう}も含まれているので
はなかるうかとは、口に出して言うことができなかった。

二人とも朝鮮人大虐殺のうわさを伝え聞いたその時から、
“もしや”の不安にとらわれていただけに、その名を口に
するのが怖かったのだ。

ところがそれから一週間めの二十五日、ふでたちは「水
平社」にとってよき理解者であり、協力者であると聞かさ
れていた大杉栄夫妻が、甘粕憲兵大尉に虐殺されたのを知
るはめになった。孝二の話によると、この事件はそれまで
掲載禁止になっていたのが、この日、やっとその一部が解
かれたということで、孝二はやや生硬な筆つきのその記事
を、ぬいたちにもわかるようにと、ゆっくり読み下した。

「甘粕憲兵大尉事件は予審が終結したので二十四日公訴
を提出した。同大尉が本月十六日夜、大杉栄外二名を某
所に同行し、之を死に至らしめた犯行の動機は、甘粕大

尉は平素社会主義者の行動は国家に有害なりと思惟し居
る折柄、今回の大地震に際し、無政府主義者の巨頭たる
大杉栄等が国家の秩序を紊乱し、不逞の行為に出るやも
はかり難しと信じ、国家の惨害を芟除せんと考えた結果
と認められる。”

そして大杉栄氏の略歴として、次のようにしるされてい
た。

「大杉栄は今年三十九歳。香川県丸亀の生れで、父は日
露戦争当時歩兵第十六聯隊の大隊長として武功を掲げた
忠君愛国者であった。その子として最初陸軍幼年学校に
入学したが、中途退学して外国語学校の仏語科に入り、頭
脳明敏と勉強家を以て学生仲間から驚嘆され、独学で英、
独、仏、露、伊の五箇国語やエスペラントの語にも通じ、
明治三十八年外語卒業後数年間獄中で社会学を専攻して、
ロシアのクロボトキンに私淑し、主義者としては極めて
色彩が明瞭であったことは言うまでもない。事にあたって
は飽くまで真摯で、意志が強く、著書には次のものがある。
「生の闘争」「社会的個人主義」「労働運動の哲学」
また翻譯には「種の起源」「革命家の思出」等。”

すると、大杉ていうそのお方は、あの幸徳てお方によく似たはってんな。”

孝二が読み終るのを待ってふでが言った。

“そうやネ。お二人は仕事の上で仲間やってン。年齢は幸徳先生がだいいふ多かったけども。”

孝二が答えた。

“それがお二人とも四十前後の若さで殺されてしまわはるとはなア。不思議な縁や。”

ぬいが沈み声に言った。あとには沈黙が落ちたが、間もなく孝二はその沈黙を破るように、“わし、東京の焼け土を踏んできたいネ。”と言った。

“そら、ええけどな、でも、だいいふの失費やで。”

ふでは先ずその点が心がかかりだった。けれどもぬいは、“その大杉てお方は、京都で水平社の創立大会があったおりも、わざわざ東京から出て来て下はったんやろが？”そのお方が、憲兵にかかって闇から闇に消されはった。こら、えらいこっちゃで。せやから孝二らはどないかししてお礼せぬことには……。それに裁判の時、すっきりお世話になった布施弁護士^{せんし}かて、どないしたはるかわからぬのやし、こら、なんとしても一ぺん東京に行てお見舞申してくるのが人間の^{みちや}みちや。”と主張。更に、“失費^{つひえ}はわいら三人、その

気になって働いたら、きつと埋め合わせがつくがな。”と、気らくな調子で言った。

孝二の東京行きはこれで決まった。そして行くなら一日も早いがよいと話が落ちつき、東海道線はまだ徒歩連絡の箇所もあったが、三人連れの勢いで一昨日^{おととい}日^ひ出^で発^{はつ}した次第なのだ。

さて、ふでが刈り株あとの土を平にならし終えた時、ぬいも仕事筵^{しん}をたたみにかかるところだった。

「あ、お姑^{おば}はん、もうすっきり片づきましてンな。」

「あ、ええあんばいに。」

そしてぬいはにこりと笑った。

「お姑はん。」

「なにえ？」

しかしふでは続く言葉がなかった。黄金色にかがやく絹雲の下、仕事筵^{しん}をたたむ老女の笑顔は、さながら年経た彫像のようだった。

「お姑はん、ぼつぼつ夕飯^{ゆふめし}ごしらえにかかりまひよか。」

辛うじてふでは言い抜けた。

「ああ、よろしなア。もう時刻やで。」

折柄、さーっと吹き寄る西寄りの風に、重ねた胡麻殻^{ごまがら}がカラカラ鳴った。

黄金色の絹雲は、黄金色のまま、ゆるやかに東に流れて行く――。

二

「ごめんなはれ。」

尋常に声をかけて表口の障子戸をあけた永井藤作は、
「あ、ええ香氣や」と、一瞬、闕際に立ちすくんだ。藤作には思いがけぬ芳香だったのだ。

「さいか。」と、ふでは眼元で笑って、

「夕飯炊きに、胡麻がらを燃やしましたもんで……。」

「どうりで、どうりで。」

藤作は、音を立ててその芳香を吸い込んだ。……実は口中にわき出た唾液が咽喉もとを下って行ったのだ。

「どうだったか？ 夕飯、まだやったら、いっしょにあがってくくなはれ。」

言いながら、ふでは竈から鍋をぬきおろした。

藤作はもじついて、「夕飯は、まだやけども……。」

「ほなら、ちようどええやないけ。」

ぬいが言った。ぬいは既に板の間に坐っていた。

「だけど、そいじゃまるで夕飯を見かけて来たみたいで……。実は、まだそんな時刻やあらへぬ思うてたもんで。」

「さいだっしやるとも。たしか平常より一時間ほども早はんネ。孝二が留守なもんで、つい早夕飯になってしもて……。」

「夕飯、食べてしもうたら、あとはもう明日みたいな氣、するよってになア。」

ぬいが言い添えた。

「なるほどなア。お婆はんもおふでさんも、早いとこ明日にしたいわけや。明日になったら、孝やんが戻ってくるよってに。」

藤作は言ううち、絶えず笑いを浮かべていた。

「いや、明日はまだ戻って来ぬかもわかりまへんけどな。どうも、こうも、日が経つのが待ち遠うてかないまへんネ。」

ふでは言いながら藤作のための食器をそろえた。

ぬいが鍋のふたをとる……。ぷーんとひろがる味噌の香。夕飯は味噌雑炊だった。

藤作は鍋の中に走る自分の視線をおさえかねつつ、

「こら、もう、ほんまにすまぬことで……。」

そして這うような恰好で板の間に上った。

「なんの、すまぬほどのご馳走やあらヘン。見ての通りのおみ(味噌雑炊)や。遠慮せぬと、よそって食べてや。」
藤作と対き合いのぬいは、玉杓子の柄を藤作に向けた。